

今治水産博物館の設計

育てる漁業の拠点施設としての提案

1. 計画背景

わが国の水産資源は、魚類をはじめ貝類、藻類などさまざまな生物によって構成されているが、近年の乱獲や水質汚染の影響により、その漁獲量は減少しており、早急な養殖業の振興が求められている。しかし、過剰給餌による自家汚染や、抗生物質の投与など養殖業の生産環境はいまだ確立していない。それにもかかわらず、我々の養殖業に対する理解は乏しく、正しい知識や教養を伝える環境は少ない。そこで、魚食文化の下に形成される歴史や技術、生産などの幅広い情報を提供し、食品安全品質に対する意識向上が図れる環境を整える必要がある。

2. 計画目的

○水産博物館として

水産博物館の新たな役割として、地域の郷土、歴史資料などに頼った一方的な展示だけでなく、より総合的な理解を得るため、参加型観覧により、来館者と専門家との間にコミュニティを形成し、漁場・養殖場や市場のような生産環境に接する機会を与える。

○養殖業拠点施設として

博物館のみで養殖業の全てを伝達するには不十分であり、周辺の漁業組合、水産試験場などの生産者の協力が不可欠となる。そこで、各協力者とのネットワークを構築し、生産者同士の交流を促すとともに、養殖業拠点施設として情報を発信していく。

○食文化施設として

瀬戸内海沿岸地域には多くの郷土料理が存在している。水産物を生態としてだけではなく食として捉え、目と舌を養うことを目的とする。さらに料理教室を設置することで地域住民との交流を図り、文化伝達に寄与する。

3. 計画地

愛媛県今治市東部の今治港の内港を計画地として施設提案を行う(図1)。

愛媛県は養殖生産額が日本一であり栽培漁業の発祥海域として多くの水産資源が存在している。また、敷地周辺には今治漁港や水揚げ場があり

現況としてはこの計画地は以前荷役を受け持っていた上屋施設が存在しているが新港湾の開発に伴い、未利用状態が長く続いている。



図1 計画地

4. 計画方針

「教育・研究」「環境」「交流」をテーマに水産に関する情報や知識を提供するだけでなく、自然環境保全の啓発機能や地域活性化を図る空間を提供する(図2)。

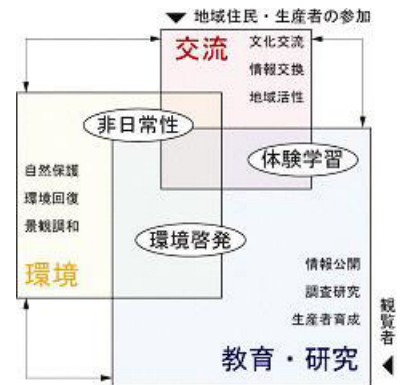


図2 空間ダイアグラム

- 「教育・研究」- 情報の公開とともに研究者や生産者との交流を図ることで体験学習を通じた水産資源に対する意識の向上や次世代の生産者育成を図る
- 「交流」- 生産者同士の情報交換の場や地域住民の参加を促すことで地域活性化を図る。さらに、自然環境との交流空間を提供することで非日常性を演出する。
- 「環境」- 養殖における浄水装置・システムを導入し展示することで視覚的に環境保全を訴える。また、施設運営には自然エネルギーを活用し施設から発生する負荷を軽減することで環境啓発を促す。

5. 機能構成

図3のように基本機能を博物館機能と地域交流機能に大別し、展示機能に加え、連携拠点やコミュニティ空間・魚食文化ゾーン等を加える。これにより、地域や漁業組合・研究所などとのネットワークを構築し、博物館では伝えきれない生産環境の情報を来観者に伝達する。さらに交流広場ではイベントの運営を行い地域コミュニティ形成することで地域の活性を図る。



図3 機能ダイアグラム

6. 建築計画

6.1 全体計画

本計画は市の計画による緑化地域との一体的な計画を行うとともに、問屋街、商店街などの古い町並みの残る旧市街地と卸売市場、大型スーパー、アメニティー施設などが近年進出している新開発地域との間にブリッジや緑化帯によるサーキュレーションを形成し港湾地域に回遊性のある交流空間を創造する。これにより今治市のウォーターフロントに広がる新旧の空間が結節され、文化交流の拠点施設となる(図4)。



図4 全体計画

6.2 配置計画

計画地の北側には海側のアイストップともなっている港湾ビルが存在しており、内港側の視線を大きく遮っている。本施設は、それをさらに拡大してしまう可能性があるため、機能ごと分散配置し、低層化を図ることで内港側の景観を改善する。また、各機能を結ぶブリッジにより回遊性を与え、新たな視点場を確保する。さらに海風などの自然条件を考慮し空間を配置する(図5)。

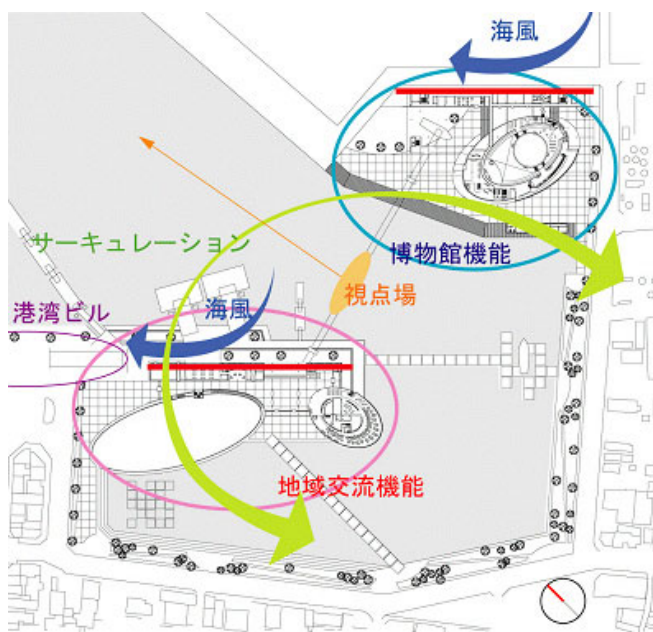


図5 配置計画

6.3 動線計画

本館は来館者との積極的な交流が図れるよう、養殖展示空間においては観覧動線と飼育動線を交わるようにし、養殖体験やレクチャーなど進んで行われるよう配慮した。その他の展示空間に関しては飼育を容易に行うため観覧動線と飼育・企画運営動線を明確に分離した(図6)。

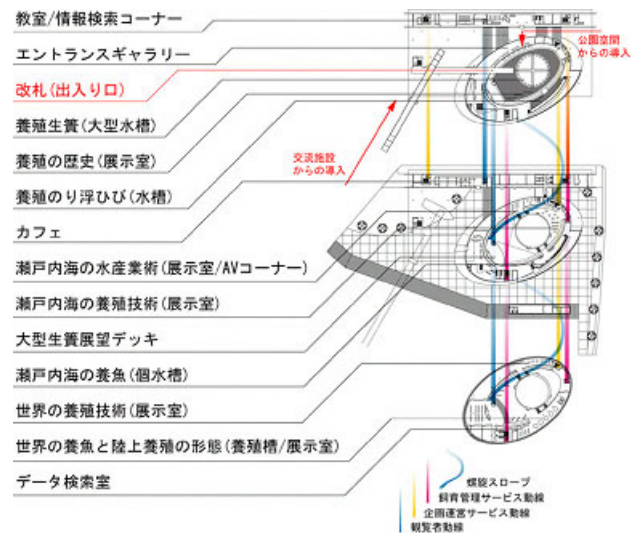


図6 動線計画

6.4 環境計画

瀬戸内観沿岸地域として特色ある自然環境条件を有効に活用することで心地よい空間を創造するとともに外部に発生する環境負荷を低減する(図7)。

- ・太陽光パネル - 計画地は比較的温暖な地域で晴天の割合が高く効率的にエネルギー吸収が図れる。ここでは半透明の太陽光パネルと併せて採用しており、それらを大屋根にランダムに配置することでその下部空間には表情豊かな陰影空間が生まれる。
- ・通風輪道 - 自然環境の再現や海藻類の養殖のためトップライトを配置しており、飼育スペースの湿度上昇が予想される。そこで、換気を促す通風輪道を確保した。
- ・公園化 - 沿岸部の緑化により、サーキュレーションと合わせて人々との滞留を図るとともに、施設から発せられる熱負荷を低減する。
- ・材料 - 離島地域において採掘される大島石は現在、埋蔵率が減少、もしくは品質の低下が問題となっているが、本館では砕石などの廃棄物を外構材料に用いる。

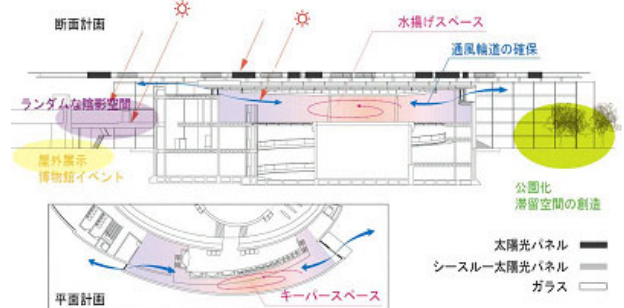
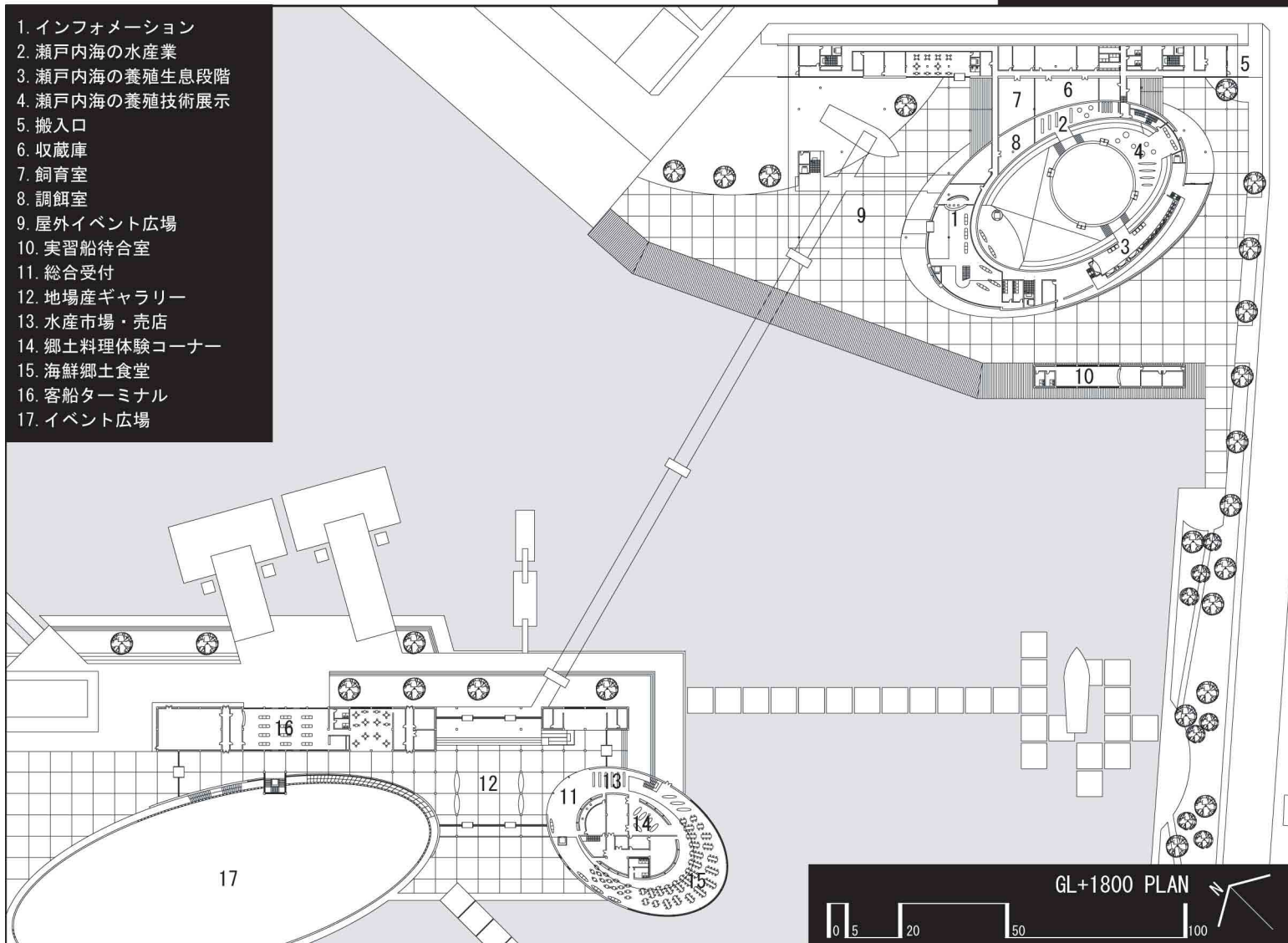
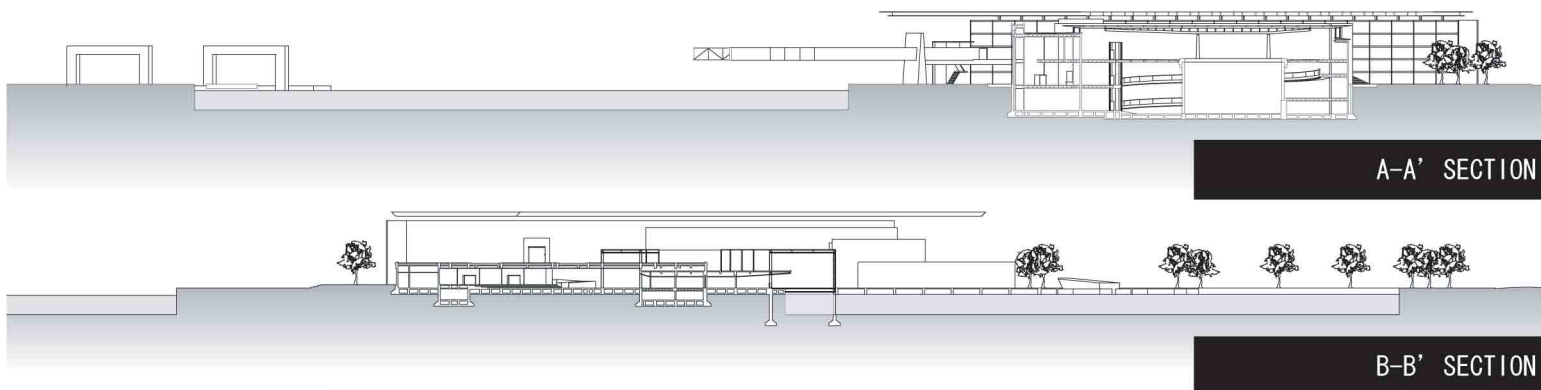
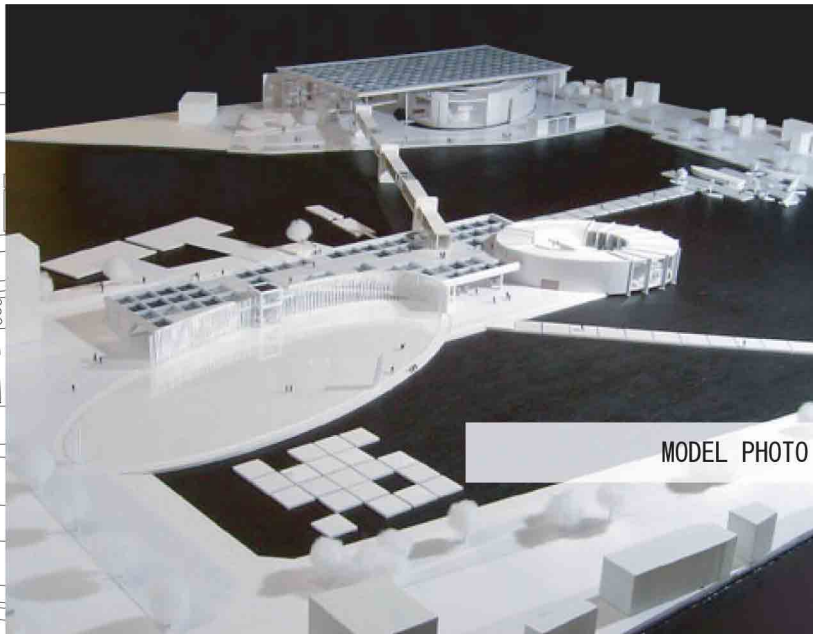
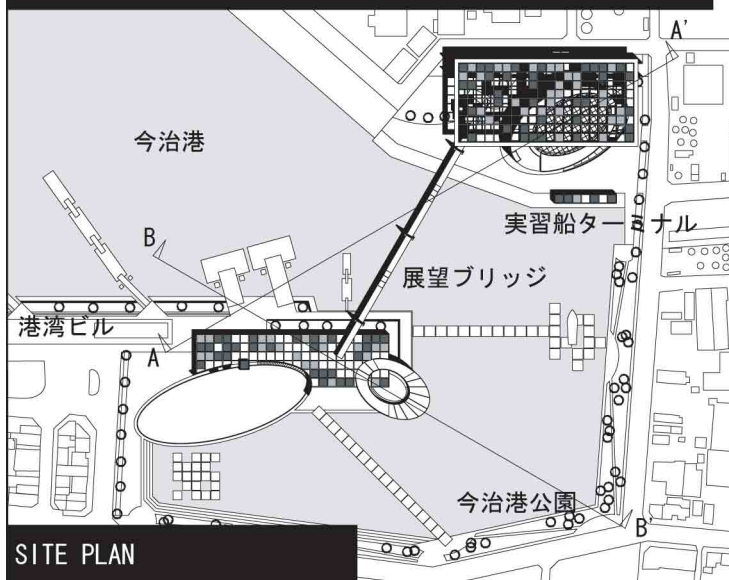
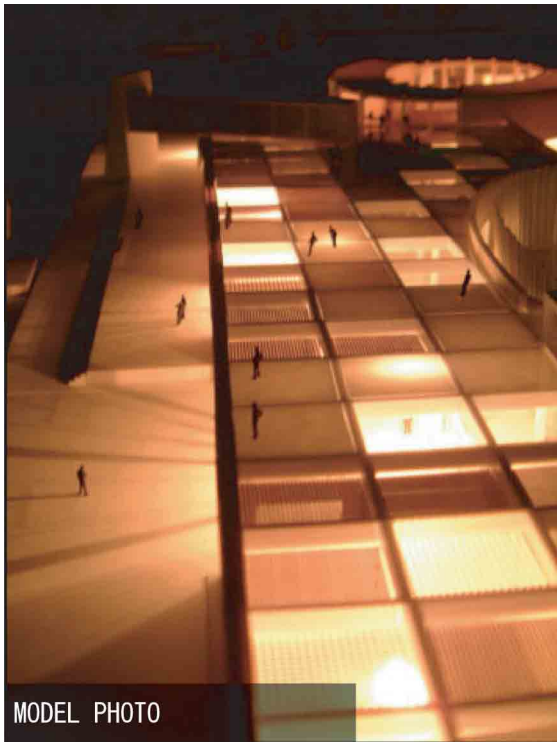


図7 環境計画

Imabari Fisheries Museum Project

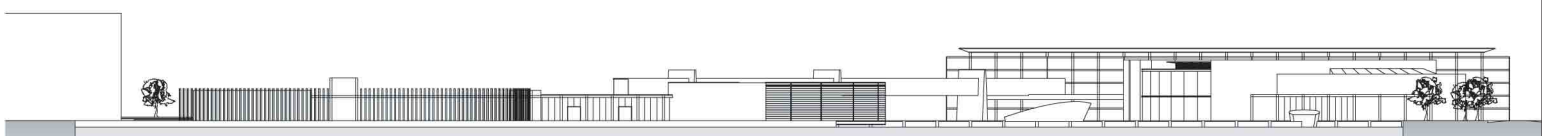




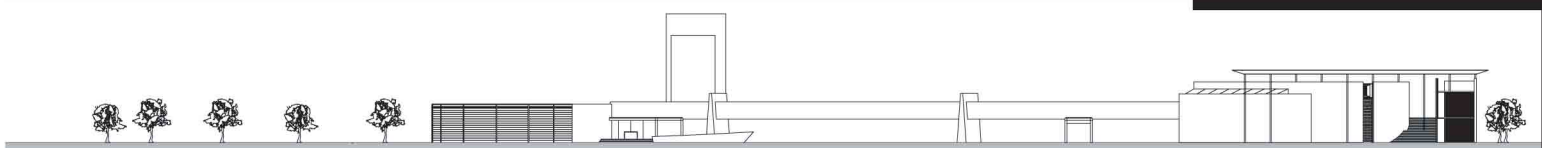
MODEL PHOTO



MODEL PHOTO

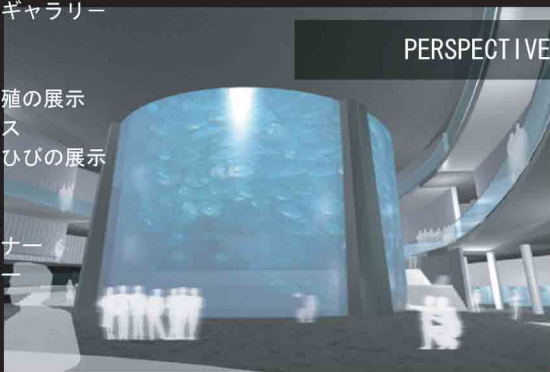


SOUTHWEST ELEVATION

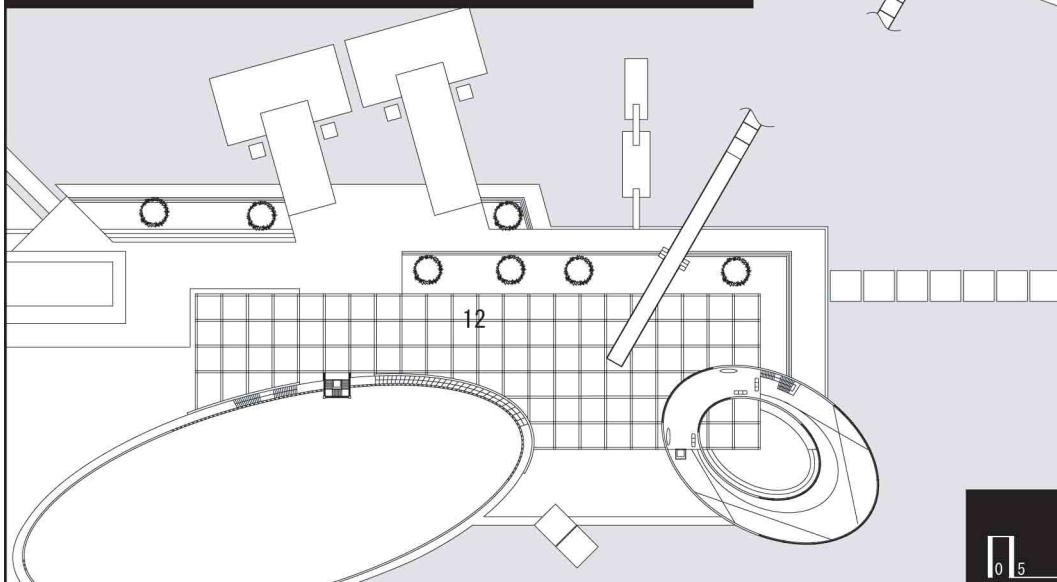
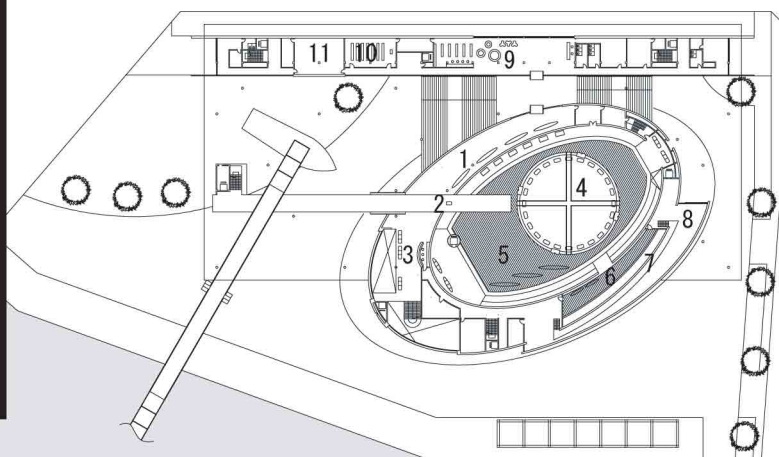


SOUTHEAST ELEVATION

1. エントランスギャラリー
2. 改札
3. 発見・受付
4. 環境調和型養殖の展示
5. 水揚げスペース
6. 海苔養殖浮きひびの展示
7. 飼育デッキ
8. フィルター室
9. 情報検索コーナー
・図書コーナー
10. 教室
11. 研究室
12. 展望デッキ



PERSPECTIVE



GL+7800 PLAN

